

# エスノメソドロジー研究の想像力

## — 社会に学ぶ想像力を解放する —

岡田 光弘 (国際基督教大学非常勤講師) ※

[※BZG00446@nifty.com](mailto:BZG00446@nifty.com)

### The Sociological Imagination in Ethnomethodology

OKADA Mitsuhiro

International Christian University

#### 【要約】

本稿は、エスノメソドロジー研究という研究手法の基礎にある「社会に学ぶ想像力」について考察した。ここでは、エスノメソドロジー研究が「社会学としての想像力」を人びとの実践に学んでいることから、エスノメソドロジー研究を実践学と呼んだ。そして、その対極にある姿勢を「理論化」と呼んで、両者の違いについて、その理路を明確にした。ついで、戯画化されたものではあるが、エスノメソドロジー研究に影響を受けて成立した二つの研究手法が、論文を筋立て、作品化する具体的な手順を示した。批判的エスノメソドロジーと会話分析という二つの研究手法である。研究手法の組織化について解明するという営み自体がエスノメソドロジー研究の研究手法を示すことになるので、都合、三つの研究の手順が示されたことになる。それによって、エスノメソドロジー研究だけでなく、批判的エスノメソドロジー、会話分析が「理論化」に抵抗し、人びとの実践から学んで「社会学としての想像力」を得ていく様子が明らかにされた。

キーワード: 批判的エスノメソドロジー, 会話分析, 社会学的想像力

#### はじめに

エスノメソドロジー研究(以下、EM)は、人びとの実践に学ぶことで想像力を手にする実践学である。人びとの実践に学ぶことを社会に学ぶと言い換えることもできるだろう。本稿では、EM という研究手法の基礎にある、社会に学ぶ想像力について、その理路を明確にしていきたい。そのため、社会学における、また社会学に対する、EM の大きな気づきには、理論化という作業が、社会に学ぶ想像力のもつ可能性を妨げないようにする効果があるこ

とを示す。その後、2, 3章でEMに影響を受けて成立した批判的エスノメソドロロジー(以下、CEM)、会話分析(以下、CA)、この二つの研究手法を対象にして、そこでの研究の手順や用いられている社会に学ぶ想像力について検討する。人びとの実践に学ぶことで想像力を手にする実践学であるEMをそのルーツに持つCAとCEMは、社会に学ぶ想像力を妨げるような理論化をしないという気づきを共有している。紙幅に限りがあり、戯画化されたものになるが、この二つの研究手法が、論文を筋立て、作品化していく具体的な手順を示すことになる(その営み自体が研究の組織化を対象としたEMの研究手法を示すことになるので、都合、三つの手順が示される)。それによって、EMだけでなく、CEM、CAのもつ、いくつかの性格が明らかになればよいと思う。この試みは、知識社会学に類似しており、知識社会学がそう見られるように、特定の研究法に対する批判であると受け取られるかもしれない。だが、CAが会話の批判ではないように、本稿でのEMの目的は、対象となっている研究手法を批判することにはない。

結論を先取りして述べるなら、CEMとCAには、それぞれの手順にEMとは異なる特徴がある。まずCEMは、社会的に重要な対象領域に「入り込み」、観察者、ひいては読者の自己反省に訴えて、データに見られる表面的な意味を宙吊りにする。フィールドワークの重要性をうたうCEMは、その言うところによるなら、理論化を避けているようにみえる。だが、残念ながら、CEMは、社会学的な発想法の根っこを引き継ぐ「構造-エージェンシー」という二分法を採用しているようにみえる。この点では、CEMは、他の二つの手法(EMとCA)と異なっている。また、CAは、「一般理論」あるいは「理論・モデル」に基づいて、理論先行型の研究姿勢を拒否することで、徹底的に、データに内在する問いを解く。ただし、データを「会話」における打ち手として組織化する方法が強力であるため、多様な現象を特定のパターンに当てはめてしまう危険性がある。それは、CAが量的な研究で言う「方法論」にあたる研究プログラムを持っているということでもあるだろう。CEMとCAは、EMの近接領域で、もっとも生産性の高い研究プログラムである。EMが学ぶべき多くの点を持つ、この研究手法の研究の手順について具体的に解明していくことで、社会に学ぶ想像力というものについての理解がさらに深まることを願っている。では、順を追ってみたい。

## 1. 理論化が見失わせるもの

### (1) 「理論・モデル」に頼ることで「構造-エージェンシー」の二項対立を生み出す

社会学の鍵となる教義のひとつに、理論の重視というものがあるだろう。社会学教育や実際の調査においては、具体的な個々の記述は、理論に従属しており、そのあるべき場所を理論の中で「見通す」ことができるということが教え込まれている。社会調査法の授業で、まず叩き込まれるのは、社会学的な分析をある種の分類作業であるとする見方であろう。すなわち、社会学者が遂行すべき課題とは、社会生活の特徴を意義深いものと、それほどでもないものにと仕分けることなのである。正しい仮説を与え、「秩序」「現実」などを「見通せる」

ようにしてくれる理論とそれがもたらす仮説の妥当性を明らかにする調査によって、それが可能になるというのが話の筋である。

社会学の教えるところによれば、理論なしに社会そのものを「見通す」ことはできない。理論やモデルのお蔭で、それ自体には秩序がない断片的なデータから、背後にあるさまざまな秩序が「見通せる」ようになるからである。逆に、理論なしでは、研究対象が「本当は」何かについて知ることはできず、不必要な議論がまき起こることになる。社会学は、自らが社会生活の複雑さに立ち向かうとき、理論を利用することによってはじめて、全体との関連において意義深いものとそうではないものとを「見通せる」のだとする。すなわち、理論は社会学者を救うのである。このように社会学における理論やモデルとは、端的に、常識を超える「見通し」を手にするために利用されるものなのである。社会学は、理論を活用することによって、メンバーの日常的な常識による知識を「超越する」のである。そして、それによって、ふつうでは手の届かない社会生活の「隠された」秩序性が「見通せる」ようになるのである。このような性格を持つ理論を「一般理論」あるいは「理論・モデル」と呼んでおこう。

社会学は、まったく別の二種類の仕方で、社会的な理論化に説明を加えてきた。社会学史は、その二種類の説明のうちどちらを採用するのが正しいのかについての論争の歴史である。すなわち、人びとの行為は、エージェンシーによって説明できるのか、あるいは、構造の内側での位置によってはじめて「見通す」ことができ、説明できるものなのかという論争である。しかし、このそれぞれに説明力を持つ選択肢のどちらかを選んでしまうこともできない。もし一方を選んで、もう一方を排除してしまうと、社会的な営みに根本的な性質のどちらかを否定することになるからである。そこで、社会的な説明は、どれくらいか、一方に帰され、もう一方にはどれくらいか帰されるのかと問う形で解決策を提起することになる。両者の配分や結び付けの方法を工夫することによって、エージェンシーによって説明する「主意主義」と構造主義者たちの説明にみられる「決定論」とのあいだの「ギャップに架橋する」上手いやり方を見つけ出そうとするのである。

ここで、いったん議論の前提に立ち戻ってみるならば、社会のメンバーの知識と行為を「超越した」レベルの社会生活というものがあり、これについて構造レベルで「見通す」ことは、社会学の「理論・モデル」と「調査方法論」を通じてのみ可能であるとする想定は、エージェンシーと構造とのあいだに想定されている二分法に依拠している。しかし、この前提を疑ってみることはできないだろうか。EMは、社会組織の特徴について、私たちが普通に用いている常識や自然言語と切り離された、社会学に固有の見方がありえると想定していない。「構造」と「意味」といったあらかじめの二分法を承認しない、社会学にとっては奇妙な、この想定がEMと主流の社会学のアプローチとの主要な相違点を生み出しているようである。

## (2) 社会学には、その「理論・モデル」に見合う方法があるのだろうか？

統計的な手法と結びついて主流となっている社会学は、こう考えるのではないだろうか。社会学の調査研究法によらないと「見通す」ことができない社会生活の構造的な次元というものがある、と。そして、この「隠された」秩序が、行為の動機や理由を説明するために決定的に重要である、と。しかし、どのようにして、社会学者は、ふつうなら探り出すことのできない次元のものを「見通せる」のだろうか。この問いへの答えは、まさに社会学固有の「方法論」によって、それが可能になるのだということだろう。その「方法論」を通じて、社会学は、そうでなければ隠されたままであった、「秩序」「権力」「差別」といったものを白日の下にさらす。たぶん、これは、素粒子物理学という方法が、そうでなければ知られることのなかった物理的なリアリティ(たとえば、放射能)を、ガイガーカウンターという計測装置によって「見通せる」ようにするのと類似した仕方で、そうするということだろう。だが、この物理学と社会学のアナロジーを保持し続けることは、きわめて困難なのではないだろうか。社会学の調査研究の手法は、少なくともそのどこかで、まったく日常的な社会の実践、すなわち、聞き取り、参与観察、テキストの分析などに、直接、依拠している。これに対しては、どうやったら、そのような日常の実践に依拠して、ふつうであれば「見通す」ことのできない社会生活の領野に接近することができるのかという難問が突きつけられる。

こうした議論に応じて、EM 研究者たちは、次のことを指摘する。まず、「ミクロ・マクロ」という二分法は、社会学のある種の概念化に、その起源をもつ「理論・モデル」と結びついた概念化である。これに対して、EM 研究者は、ふつうの意味では、社会構造を「理論・モデル」で「説明」するという目標をもたない。EM 研究者にとって、社会構造は、専門職としての社会学的な分析を通じてのみ「見通す」ことのできる「隠された」現象などではない。むしろ、社会生活のもつ組織されているという性質は、社会のメンバーによっても知られている明白なものである。メンバーは、社会をいまあるようにしているまさにその活動を産出するとき、社会構造についての常識による知識を採用している。そうした常識(に埋め込まれた社会構造)は、実効性のあるもので、それらを上手に使用しないと、社会生活は、スムーズに進んでいかないだろう。EM は、社会学の理論に頼ることなく、その現象についての記述が可能であると想定している。それゆえに、EM 研究者が、壮大な「一般理論」や、それよりは範囲の限定された「理論・モデル」を求めるといふ理論化を拒否することは、人びとが用いている概念の普遍性や社会生活やそれを支えている対象の実在性を拒否することではない。

これまで述べてきたような理由に基づいて、EM にもとづく社会学は、「実証主義」「反証主義」といった主流の社会学の認識論に基づく「理論・モデル」と「方法論」のセットを捨てることになる。

### (3) 「理論・モデル」をプラトニズム的に信奉するという意味での实在論の立場をとらないということ

社会(現象)を「見通す」ことができるようにするために「理論・モデル」と「調査方法論」のセットに頼る必要などないという主張が、EM を特徴づけている。人びとが作り上げ、まとまりのある社会(現象)には、もともと、一目でそれと分かるという意味でのアカウンタビリティが備わっている。EM も観察可能な現象との対応関係が見て取れるものについて概念化し、データと厳密に対応している研究成果の報告を組み立てようとしている。ただ、そこから、抽象化によって「一般理論」あるいは「理論・モデル」を導くことこそが「秩序」を「見通せる」ようにすることなのだといった見方はとらない。

EM の祖である H.ガーフィンケルが、A.ギュルヴィッチや A.シュッツといった現象学者と交わり、また、会話分析(CA)や成員性に由来し、成員性をつくりだすカテゴリー化という装置の分析(MCA)という具体的な分析の手法を開発した H.サックスが L.ヴィトゲンシュタインや J.L.オースティンから学ぶことで手にしたのは、個々の現象が自らを組織していくメカニズムに寄り添うという態度を採用することである。一般理論によってだけ、個々の現象の背後にある实在を見通すことができるとして、現象の背後にある、プラトニズム的な意味で一般的なものを求めると、その過程で、現象の詳細を見失ってしまう。

EM や CA、そして MCA が経験的な研究に強く志向していることは、広く知られている。社会生活の詳細な秩序性を認め、そこに目を向ける。これは、具体的な対象や秩序現象に対して、「目に入っているものは、あるがままにそこにある」という、いわば、「素朴に」实在論的な態度を取り、「理論・モデル」に対しては、そうした实在性を、根拠無く自明視することはしないという態度を取ることである。そして、これは、ふつうに社会学で用いられる「社会实在論」対「社会唯名(名目)論」、あるいは「方法論的な集合主義」対「方法論的な個人主義」といった対立ではない。このように「理論・モデル」に頓着せず、現象に向き合う、実践学として解放された想像力は、歩みの鈍いものに見えるかもしれない。具体的な現象を分析した結果、私たちは、それをある概念によって要約できる場合には、できるだけ正確な概念化を行う。そうした概念化は、実際のフィールドで、個々の事例について、その概念が実際に効いていると観察できるものでなければならない。EM は「社会構造を無視している」とする批判は、EM が、活動それ自体に焦点をあわせ、一步一步、研究を進めているという事実を見落としている。

活動それ自体に焦点をあわせるというのが意味するのは、メンバーの知識、理解が、「一般理論」を経由しなくても、人びとが言うこと、そして行うことのなかで、手に入るということである。まさにその行為において、またそれを通じて、人びとは、お互いに「何が起きているのか」についての理解を目にしている。だから、このように言うことができる。理解は、人の頭の中に限界付けられた「私に秘められた」ものではない。人びとの理解は、「公に開かれた」ものである。理解のもつこの公的な性質には、研究の方法に影響する重要

な帰結がある。すなわち、これは、理解するという行為の接続を具体的に手にとって、社会的に研究できるということを意味しているのである。それは、個々の参加者の理解が、EM研究者が手にするデータのなかに「見通せる」ということと同値である。それゆえ、もしEMによる社会学を真剣に受け取ったなら、「理論・モデル」と「調査方法論」のセットという、世界を「見通す」ためのツールを失う代わりに、「理論・モデル」を構築するという目標に縛られずに、特定の「方法論」に縛られずに、人びとの想像力の発露を目にし、「社会に学ぶ想像力」を明らかにすることができるようになる。そして、社会生活のすべての領域が研究の対象になる。

## 2. 批判的エスノメソドロジー

### (1) 「内側からの視点」「外側からの視点」という二分法の採用とそれぞれの相対化

批判的エスノメソドロジー(CEM)は、「エスノメソドロジーという研究実践を自分なりに学ぶことをとおして」[好井, 2005:15]作り出された研究手法である<sup>(1)</sup>。EMに学び、自らの正統性を主張するさいに、多くの部分をEMに負っているCEMではあるが、その研究方針の重要な部分は、EMのそれと相容れない。それは、CEMは、理論化に依拠した従来の社会的な想像力も、色濃く引き継いでいるということである。CEMにおいては、社会学の理論化を手助けしEMが拒否している二分法がさまざまな形で採用されている。それは、「内側からの視点」と「外側からの視点」、あるいは「当事者の視点」と「研究者の視点」という二分法である。この章の結論を先取りして言うなら、CEMは、こうした二分法を説明の資源として用いることで自らの説得力を強めているということになる。すなわち、いったん相対化したエージェンシーをふたたび持ち出すことで、自らの説明を読者の「実感」に繋げ、説得力を生み出しているのである。もともと、「CEM研究者」も「人びと」の部分集合であるはずなのに、CEMにおいては、「CEM研究者」と「人びと」という、現実を見る互いに排他的な二つの視点が設定される。それによって、実際の相互行為を「実は、見えているままではない」と相対化(アイロニー化)して、その価値を奪うのである。この過程には、「常識」という呪縛から解き放つという名前が与えられている。

社会学者として、参加者の実践をアイロニー化する姿が顕著であり、通常の社会的な理論化の作業が明らかに見取れる例としては、「男が女を遮るとき」[好井・山田, 1999:213-249]という論文がある。そこで好井は、「割り込み」について、その生起率を統計的に示した後、「男性の女性に対する会話達成における支配という差別的現実」[好井・山田, 1999:245]と説明する。『沈黙』は、『話す権利』をめぐる権力現象」[好井・山田, 1999:222]だとして、今後の課題の一つとして、こうした「日常的・差別的現実とよりマクロな制度的諸構造との関連を可能にする理論図式の提示」を挙げる。最近の著作でも、

日常的排除の現象学は、まさに相対化する営みの一つの形であり、私たちの「社会的実

「常識」という呪縛から解き放とうとするのである。[好井, 2005:36]<sup>(2)</sup>

と、相対化、すなわちアイロニー化を自らの立場としている。これを「EM 研究は、定式化やことの真偽についての理論を目指してはいない。そうした事柄は、アイロニーとして行われるなら有効性をもたない」[Garfinkel, 1967:viii]という EM の研究方針と比較して欲しい。すなわち、こうしたアイロニー化を用いる時点で、CEM は、EM の基本的な前提から決定的に逸脱し、EM とは別のものになっているのである。

アイロニー化が行われた後、今度は、研究者の特権が疑われ、まさにこの作品を読む読者と、読み方を指示する作者との「いま・ここ」が特権化される。そしてそこで、CEM 研究者としての作者は、レトリックによって、読者とともに考えることを促し、説得を行う。日本に独特の学派としての CEM の特徴は、この点にある。これについては、3 節で詳述する。

後に述べるように、CA は、データから会話のテクノロジーを析出するため、徹底的にデータに寄り添う。いわば「内側」への圧縮である。「内側にある」データを対比させたり、範型とその派生体というように提示したりと配置を工夫することで、データをして語らしめるという手法が用いられている。読者が、データとなっているものと同じ実践を行っており、データについて十分な理解が得られるメンバーの一人であることから、結果として、「内側/外側」という二分法が解体されるのである。データに徹底的に内在することで、データに外在的な「構造—エージェンシー」といった対立の軸が解体していくことになる。それに対して、「差別」「排除」や「権力」といった、特殊な性格を持つ対象を扱う CEM は、何らかの理由で、データに内在し、そのメカニズムを扱うといったことはしない。CEM 研究者は、アイロニー化によって、データや論文を読む読者に、構造を「外側」から「見通す」視点を与えるのである。すなわち、このとき、読者が、「構造—エージェンシー」という二分法の一方の極にあるエージェンシーであるという点は盲点として隠される。これは、CA とは、別の軸で、二分法を解体しているように見える。だが、よく考えてみると、CEM は「構造—エージェンシー」という二分法を解体しているのではなく、構図自体をエージェンシーの側にずらして利用しているようにみえる。

日常的排除というテーマを考えようとするとき、少なくとも二つの現象が視野に収まってくることになる。一つは、向き合っている現実や人びとの営みのなかではたらいっている排除の様相であり、いま一つは、排除という現象をある視点やある理論、方法から接近し、読み解こうとしている私たちの術のなかにある、あるいはそうした術を意味あるものとして使用している私たち自身の実践のなかにある排除の様相である。こうした発想は、私自身、エスノメソドロジーという研究実践を自分なりに学ぶことをとおして実感してきたものであり、すでに言葉や形を変えて、何度も同じような主張をし続けてきている。[好井, 2005:14f]

ここでも好井がしているのは視点、理論、方法というものを具体的な実践のレベルではなく、構造的な理解のレベルで反省的に捉えなおすということである<sup>(3)</sup>。

## (2) ポルナーの立場：二つのラディカルさ

好井の理論的な守護者は、M.ポルナーであろう<sup>(4)</sup>。ポルナーにとって、ラディカルな探究とは、まず、1)常識(の存立基盤)を疑うこと(=アイロニー化)である。だが、彼も、そうした主張を維持することが困難であるという点に気づいている。どういった根拠に基づいて、自らもよって立つはずの常識(ポルナーの場合は、「この世界を支える理由付け」)を疑えるのだろうか。主著である「この世界を支える理由付け (Mundane Reason)」[Pollner, 1987]では次のように述べている。

ラディカルな探究という考え方は、便利な説明の道具ではあるのだが、それがまさに探究であるという事実から、この世界を支えるあり方 (mundancity)への探究は、この世界のものだとするしかない。[Pollner, 1987:22]

だが、この事実を突きつけられても、彼はアイロニー化を放棄することはしない。そして、懐疑論に突き当たる。ポルナーは、この著書の最後の部分で、「どうやったら、超越的な立場にたてるのだろうか」[Pollner, 1987:148]と問う。何らかの別の根拠付けによって、この困難を乗り越えなければならない。ポルナーは、そのように考えるのである。そして、ラディカルな探究として、2)自己言及というありかた「以外ではありえないということ」[Pollner, 1987:148]に基づくという根拠付けに到達する。そしてこれを、ポルナーは、その著書のまさに最後の一文で、3)自己反省の運動をやめないこと(=無限運動)と読み替えるのである。

この世界のプロセスは、社会、言説、そして意識の深層のレベルで働いていることを考えに入れるなら、脱物象化には、ラディカルな反省に向かう、永続的な自己革新と深化の努力が求められる。[Pollner, 1987:150]

ポルナーはここで、メカニズムを運動と取り違えている<sup>(5)</sup>。「無限運動」は、インデックス性、相互反映性を強調することと強い結びつきがある。常識とは違って、人びとが気づかぬうちに無限の意味確定作業を行い続けているとするイメージである。これが「アイロニー化」と結びつくことで、ポルナーが得たのは、すべての相互行為に背後に意味をめぐる闘争があるということ、経験の政治学が遍在しているという視点であった。好井・山田らのCEMは、この「無限運動」や「闘争の遍在」という立場を共有している。それも、これがEMの立場であるという「誤読」をすることによって。現実を経験の政治学「として」見ることで、

相対化するのである。こうした相対化、すなわちアイロニー化を行うという点で、CEM は、現実構成主義とも共闘している。この立場は、日常生活の態度の外にいる理論家しか見えないものを見るウルトラな客観主義とも言えそうだし、日常生活の態度からは目に入らないものを見るウルトラな主観主義とも言えそうである。

結果として、ポルナーらは、ギリシャ神話におけるシジフォスのように、現実の人びとの営みと関わりなく、自らに与えられた苦役を引き受け、グルグルと螺旋運動を続けるしかなくなる。日本の CEM のオリジナルな点は、そうしたシジフォスな無限運動と経験的なデータを扱うという作業を調停する独特のレトリックを作り上げていることである。次節ではそれについて明らかにしていこう。

### (3) 「いま・ここ」にあるのは読みの実践なのだ

次に、ポルナーから離れて、日本の CEM が独自の手法としている、エージェンシー(近代的な自己)への圧縮ということについて、説明していきたい<sup>(6)</sup>。好井らは、突如としてアクロバティックに「構造—エージェンシー」という対立図式を越えたかたちでエージェンシーを持ち込むのである。あえて定式化してみると、CEM では、そのラディカルさ(=アイロニー)の結果、それぞれのフィールドで、参加者によって達成されている意味は、生き生きとした意味合いを失い、色褪せ、社会学の常識である「構造」を取り込んだ「外側」からの視点によって相対化されている。フィールドで何が起きているかに内在したり、そのメカニズムを解明しようとするのではなく、突然現れたエージェンシー(まずは編者の好井であり、それに促された読者でもある)が、フィールドでの現象をアイロニー化して、価値の引き下げを行うことによって作品化が可能になっているようである。ここで行われているのは、いわば、参加者の実践の「無効化」「不条理化」である。「不条理化」といっても、データの意味が理解不能にされるわけではない。フィールドでは、スムーズにコミュニケーションが流れていくという図柄が崩れ去り、そこには、「差別」や「排除」という、以前とは別の強烈な図柄が現れるということである。参加者がデータで達成していた意味は、常識というカテゴリー化に縛られた虚像として、いったん、棚上げされる。まず、「差別」「排除」や「権力」が支配するフィールドでは、参加者たちのコミュニケーションが歪まざる得ないことが確認される。エージェンシーの側に立ちながら、まさにエージェンシーそのものであるともいえるフィールドの当事者の実践を「無効化する」という一見するとアクロバティックなことが行われているのである。

いったん棚上げされ、「組織化」を妨げられた常識が、ある種のレトリックによって、素材として利用される。CEM においては、現象を産出する具体的なメカニズムは、ブラックボックスに入れられたままリソースとして用いられることになる。それは、具体的には、どのようなやり方なのだろう。特徴的なのは、フィールドで得られたデータや知見が「組織化」されるプロセスは、観察している研究者の反省作用とペアになっている、ということである。

すなわち、まず、調査研究者の、そしてそれを再解釈する著者の「とまどい」が召かれる。さらに、読者に、調査研究者の「とまどい」を迫体験することを求める。このようにして読者を巻き込むことで初めて、論文にストーリーが与えられる。いうならば、作品を読むという「いま・ここ」へ圧縮しているのである。CEMにおいて、フィールドに「入り込む」ことによって、研究者に普段は、参加者が見ることのできない常識の「ほころび」が見えてくる。そして、読者にインストラクションが与えられるのである。あるいは、CEMを行う、読むという作業が、具体的な研究に先立って、隠されている「ほころび」を「見通せる」ようにするという社会学のもたらす想像力に依拠しているということなのである。日常に遍在している常識という権力が、当事者の目を惑わせ、現実から目をそらさせているのを前にして、研究者は「とまどい」を感じる。そして、読者は、著者ととともに、調査研究者にその「とまどい」を生み出した原因を探るようにと促されるのである。

以上のように、著者が、様々な方法で、読者にその場面に埋め込まれた意味をアイロニー化し、それ以上の意義付けを「見通せる」ようにする。それによって図柄が反転する。著者の促しに応じて読者が読み込むものを除いて、データ自体の内在的なすべての組織は解体の対象でしかない。CEMの世界では、「いま・ここ」で作品を読んでいるという「読者、あなた」の実践こそが、唯一の現実なのである。「組織化」にとって、フィールドについての調査研究者による解釈(の「せめぎあい」)を読者に迫体験させ、「見通せる」ようになるという構成が決定的に重要である。そこで採用されているのは、読者の理解に言及する、いわば、読者に「語りかける」文体である。フィールドワーカー、著者、読者のそれぞれに「自己反省」を促す文体が採用されているということである。最終的に、解釈の作業は、近代的な自己(エージェンシー)としての読者の努力にゆだねられている。

「語りかける」文体を採用するということは、データをして語らしめるということとは対照的である。読者が、データを読むためのインストラクションを与えることで論文を組織するという仕方は、実のところ、みごとに読者に向けてデザインされている。「語りかける」文体は、専門書や学術論文に置かれていることで、権威付けされ、説得力を得ている<sup>7)</sup>。もともと、日常的には、お説教と扱われかねないことが、社会的に配分されている知識の位階構造によって、力を得て、読者はインストラクションにしたがい、外在的な視点から、そこに排除というものが「見通せる」ようになるのである。

ある現象を研究しているときに、その現象から何が導かれるのかをあらかじめ言うことができない。これが、EMの特徴である。CEMにおいても、特定の社会学の「理論・モデル」が、データの重要性を決定するという事は無いはずである。だが、CEMにおいては、研究対象になっている素材の重要性が、分析の結果として示されるのではなく、分析に先んじて、伝統的な社会学の想像力と社会学的な常識に依拠して存在している。このことには、伝統的な社会学の方法とEMの発想をつなぐという意図によって行われているように思われる。

というのも、CEM にとって何を研究対象にするのか、ということが決定的に重要になっていると思われるからである。特に、「差別」「排除」が、人びとの心に潜んでいること、また参与している本人たちにも「見えない」問題があるという社会学的な常識における重要性、これが、個々の研究の意義を担保している。そうした課題に沿って、基本的な図式として、CEM 研究者/人びとという非対称的なカテゴリー対が用いられているのだろう。こうしたカテゴリー化が、人びとに社会学者が含まれているという事実を見失わせ、人びとには「見えない」ことが CEM 研究者には「見通せる」という根拠になっているのである。「見えない/見える」という区別が「批判的」という言葉を成り立たせているのかもしれないのだが、研究においては暗黙の前提になっており、またレトリックとして用いられている。もしも、この「見えない/見える」といった区別について、それ自体を対象として検討されるなら、「批判的」ということばに内実が与えられ、CEM の社会学的な関心が、ふたたび、EM にとって意義深いものとして現われてくるかもしれない。

### 3. 会話分析

#### (1) 「組織化」の原理

この章では、社会に学ぶ想像力のモデルとして CA を扱うことにする。CA を一種の実践的な推論からなる社会学として扱うということである。EM は、自分たちも含めたすべての社会的な実践の方法を分析しようとする。EM 者も会話をするわけであるから、そこには自己言及性があるだろう。しかし、以下の論考で明らかのように、そこにあるのは「無限後退」などではない。

扱うのは、現在に至るまで累積的な知見を積み上げてきた CA の基礎にある「同定と識別」という論文[Schegloff, 1979]である。この論文においては、後に CA において、頻繁に、通常の道具立てとして使用されることになる「次のターンでの修復の切り出し」「試みの徴(try marker)」といった概念が提出されている。この論文のなかで、どのようにして、そうした装置の発見や「組織化」が達成されているのかを見ていこう。それによって、社会に学ぶ社会学の実践的な推論の性質を例示してみたい<sup>(8)</sup>。

まず、いかなる活動や制度も、それを構成している実践とのかかわりで扱うことが可能である。社会的に観察可能な現象の一つ一つについて、「それは何か、どのようにして産出されたのか?」と尋ねることができる。活動はすべて、それらを産出している方法を表示しているというのが EM の公理である。

ではこれから、こうした原理を利用することで CA がくみ上げて行く実践の性質を見ていこう。いくつかの手順が、CA を蓄積的な営みとして形作る文脈を確かなものにするために用いられている。それらの手順によって、一つ一つの分析が、段階的に、理にかなった枠組みのなかに当てはまるようになっていくのである。

## (2) データに忠実であることで解決法とパズルが構成されること

このシェグロフの論文の主題は、会話のオープニングでの呼びかけ、応え、名乗りや挨拶、あるいはわずかな沈黙や確認といった発話、そしてそれによる相互の識別、すなわち、聞き分けの組織化である。収集された 450 の通話というデータの集成は、筋立てられることで、もともと、それが解決策をもつパズルであることが示される。データの収集を終えた時点で、シェグロフは、すでに、問われるべき問いとそれに対する解決策を手に行っているということになる。分析的な課題は、この集成が解決策になっている問題を発見するということである。論文の内容を「パズル—解決策」という二分法に当てはめてみることで、その構造が、問題へのシステムティックな解決策の集合を明らかにする仕方を示すことが可能になる。ここでデータの集成が与えてくれる問題とは、呼びかけ、応え、名乗りや、挨拶、あるいはわずかな沈黙や確認といった発話を、どのようにして、会話のオープニングにおける相互の識別の達成という実践的な問題へのメンバーの解決策として記述するかというものである。この分析的なパズル解きには、CA という学問領域を独自の研究領域として打ち立てていくための制約がある。CA において、データの分析は、可能な限り、ターンの取得とかかわりを持つものべきである。また、それが可能なところでは、行為が接続されていく際の選択肢は、優先性が階層化されているように配置されるべきである。そして、通話のトピックやカテゴリー的な素材を組み込んだ説明が、より広い接続上の標題のもとに包含されているべきだとされる。

通常、文脈と呼ばれる、データを取り巻くさまざまな事柄は、通話において相互に相手が誰かを聞き分けていく際の組織化の適切さをみるために無視される。そうした行為の接続における位置どりに注意を向けることによって、見分け(聞き分け)がなされ、パターン化されていく。核となるのは、聞き分けが成立して、しかる後に挨拶が交わされるという手順である。この「見分け(聞き分け)—挨拶—本題」という手順は、かならず明示的な識別、すなわち聞き分けがあつて、その後にならず、挨拶があるという「事実的」な秩序のことを言っているのではなく、それが電話での「出会い」であるということ定義づける、いわば「論理的」なものである。ここでは、特定の電話での出会いが、参与者たちにとって持っていたはずの個別的な意味は、「聞き分け—挨拶」という手順の進行として、捨象され、さしあたっては、「組織化」の過程から除外されている。以下は、スムーズに「聞き分け—挨拶」にいたる例である。

A: もしもし  
→B: コニー?  
A: そうよ、 ジャニー (J.G.#65a)

受け手である A は、ある時には、B による「もしもし(Hello)」という声のサンプルだけ

から、あるいは、この例のように「コニー」といった、受け手への呼び掛けの術語、そしてまたときには、「おふくろ?」のような豊かな推断を生むカテゴリーに基づいて名乗る呼び掛けの術語などの「手掛かり」から、手短に、掛け手である B が誰であるのかを聞き分ける。聴き分けた証拠となる基本的な形は、ときには、矢印で示した「試み」のように、普通は、呼び掛けの術語として、掛け手が通話の相手を聞き分けたことを表示するターンに含まれることになる [Schegloff, 1979:51]。この例では、さらに A は、次のターンで、誤解の可能性をなくすように、掛け手である相手の名前を「ジャニー」と呼びかけ、自分の側も、受け手が誰であるのかを聞き分けていることを示している。

ここで確認しておいたほうがよいのは、出会いが、「最少の努力」によって「聞き分け—挨拶」と進むことが、活動が「普通に」「標準的に」「規則的に」起こる手順についての通常環境、あるいは、それ以外の進行を「図柄」として示すための地となるということである。ひとたび、この「最少」という原則が認められ、それが図になってデータが秩序だてられるようになると、これと関係付けられることで残りのデータ群が、聞き分けが「なされない」、挨拶に「進まない」といったように、範型からの派生体であると示されるようになる。以後、確実に、標準的な手順が、「最少の努力」による達成物とみなされるようになる。たとえば、次の例にあるように、沈黙が、「最少」の手順によらない相互行為の派生体として、特定の図柄として示されることになる。たとえば、

A: もしもし  
 B: コニー?  
 →A: (.)

個々の事例が、範型となる地と対照されることで、特定の図柄を示すものとされるようになる。一見すると無秩序に見えるものが、比較や対照によって、同じ範型を共通の地にもつ派生体であるとされるようになる。この場合、A の側のわずかな沈黙「(.)」は、掛け手が誰であるのかの聞き分けが、いまだに、達成されていないことを示す「次のターンでの修復の切り出し (Next Turn Repair initiator)」だということになる。たとえば、

A: もしもし  
 B: コニー?  
 →A: (.)  
 A: だれ?

すなわち、沈黙「(.)」は、→で示した「だれ?」を先取りするもの、あるいはそうした具体的な問いの機能的な等価物であるということになる。これは、この後、沈黙の後に、掛け

手である B が、自ら名乗るデータと対照させられることで、明確になっている。沈黙「(.)」が、名乗りを促すものと見て取られることになるのである。

A: もしもし

B: コニー?

→A: (.)

B: ジャニーだけど

「最少の努力」による達成物というものを範型として、類似する多くの発話群が、その派生体として組織だっているとして理解可能になる。そして、データに繰り返し現れる活動には、それぞれ名前が与えられている。先に矢印で示したような「コニー?」には、「同定の試み」という名前が与えられ、トランスクリプト上において(.)として示された沈黙には「次のターンでの修復の切り出し (Next Turn Repair Initiator)」といった、活動を要約する名前が与えられている。確かに、このように概念化することには、データにある細かな違いを無視させる危険性がある。しかし、CA においては、実際のデータを用いることで、そうした一般化への危険を回避し、理論化への野望が解毒化されている。

こうした概念化、あるいは分析的な装置によって、シェグロフは、データをまとめるということを見栄え良く、そしてとても効率的におこなっている。論文において、表面上は同じもののように見えないデータが、基盤となる図式のなかで順序だてられ、分類されるのである。会話において用いられている装置は、基盤となった最少の範型的な形式と同じ課題を達成するための、それぞれの状況に即した効率のよい手段なのである。CA による整理は、もともと人びとの実践が方法に基づいて秩序だっているからこそ可能な作業なのである。

## おわりに

社会学的な想像力は、もともと、社会生活についての想像力だったはずである。そして、社会学は、本来的に、経験的なものを探求の対象にする学問のはずである。それゆえ、現実の姿を「見通す」ために理論化が必要であるというのは、一種の転倒ではないだろうか。ふつうに目にすることのできる社会が、想像力に満たされているとするなら、そうした経験的なものを探求するはずの社会学にとって、理論化は、過剰なのではないだろうか。EM は、「理論・モデル」と「調査方法論」のセットに依存して可能になっている社会学的な想像力を脱理論化し、これを社会から学ぶ想像力と読み替えることで、この不要な制約からの解放を促す。「理論・モデル」と「調査方法論」のセットでものを考えるというのが、社会学の常識であるのなら、この点で、EM は、社会学という営みに脱常識を促す社会学である。EM から学び、対象との関連で独自の展開可能性を追求してきた CEM と CA は、それぞれの仕方、社会から学ぶ想像力を駆使している。それによって、社会に学ぶ想像力と「差別」や

「会話」についての社会的な想像力とを両立させようとしている。

本稿では、EM を成り立たせている考え方の基本を概説した後で、CEM と CA が、論文を作品化する過程で行っている「組織化」について解明してきた。「組織化」を成立させて、想像力を発揮する前提にあるのは、CEM においては、社会的に重要な対象領域に「入り込み」、観察者、ひいては読者の自己反省に訴え、データに見られる表面的な意味をアイロニー化することであった。それは、読者の「いま・ここ」を宙吊りにすることで成り立つ。CA においては、「理論・モデル」についての実在論を拒否することで、データがもともと内在させている問いと答えの対を析出し、その姿を明らかにするという手法が用いられている。そうした手法を用いて作品化することで、CEM と CA という二つの研究手法は、独自の研究領域を作り上げ、差別という対象、会話という対象について、その姿を明確化していくことが可能になっている。そこでの作業は、データに向き合い、会話を構成するテクノロジー、差別を現象させる人びとの営みを明確化するということになるであろう。

既に述べたように、主流となっている社会学は、社会のメンバーの知識と行為を「超越した」社会構造というものを仮定している。そして、社会学の「一般理論」、あるいは「理論・モデル」と「調査方法論」を通じてのみ、この構造レベルを「見通す」ことが可能であると想定している。EM も、人びとが、特定の目的に理論やモデルを用いており、それを役立てていることを知っている。だが、EM は、モデルの構築も実践に埋め込まれた人びとの方法の一つであり、社会組織の特徴について、常識や自然言語と切り離された社会学に固有の見方があるとは想定していない。実際の現場で使われるモデルが、実践的な制約の中での実践的な目的に沿った方法であって、何でも説明できる「理論・モデル」や何でも切れる万能の「方法論」ではありえないように、社会学にも、それぞれの対象にあった研究手法が必要であるとするのである。そのために必要とされる社会学の想像力は、対象の詳細に寄り添うことでしか解放されない、社会に学ぶ想像力であるべきだというのが、EM の主張なのである<sup>(9)</sup>。

## <註>

- (1)現在、批判的エスノメソドロジー(CEM)という名称が、具体的な研究集団や研究手法の「自称」となっているのかは定かではない。とはいえ、特定の研究集団、あるいは特定の出版物群と結びついた集団を「他称」するものとしては存在しているだろう。例として、「批判的エスノメソドロジーの語り」「繋がりと排除の社会学」などがある。こういったかたちで連字符をつけた EM を名乗る研究集団は、日本以外には存在していないと思われる。
- (2)この部分でいう、現象学は、エスノメソドロジーと互換的に用いられているように見える。好井は、両立するとは限らない、社会学、現象学、エスノメソドロジー、フィールドワーク、ライフヒストリーといった用語を互換的に使うというレトリカルな実践を行うことで、それぞれの意味を脱構築している。

(3)この部分で、好井は、自分がやっている研究が EM ではなく、EM から学ぶことで EM 以外のものを行っていると読むことができる。それは、社会学の文献になら、通常ここにあるはずの引用や文献が挙示されていないこと、「自分なり」という副詞が用いられていることで示されている。

(4)本来は、著者たちの自己理解に沿って、論点を整理して行きたいのだが、残念ながら、好井が、自分たちの研究手法や認識論について、具体的に、自分の言葉で語っている部分は、極端に少ない。私たちは次節において、その認識論の筋道を M.ポルナーの言葉を借りて確認することにする。

(5)実は、ポルナーが、自己言及的なありかた以外ではありえないということをも自己反省の運動をやめないことと読み替えた時点で、メカニズムを運動と読み替える「誤読」が起こっている。CEM が、さらに、運動する主体を読む主体とすることはその延長であるように思われる。

(6)EM が、その場を組織化していく姿を記述することで相互反映性(リフレキシビティ)をアカウンタビリティにもとづいて、「繰り込む」ものであるのに対して、ラディカル・リフレキシビティに依拠する CEM においては、相互反映性の自己反省という側面を強調し、読者に調査研究者の驚きを迫体験することが求められる。本節は、そのために採用されている仕組み、レトリックについて解明している。

(7)著作や論文を置くという点では、編著において、タイトルだけでなく、どの研究をどの章にどういった題目の元で掲載するのかといった章立ても同様に重要である。たとえば『エスノメソドロジーの想像力』という本の章立ては以下のようなものである。

エスノメソドロジーの世界へようこそ

1 エスノメソドロジー運動

2 エスノメソドロジーのクリティーク

3 社会問題のエスノメソドロジー

4 エスノメソドロジーと隣接領域

エスノメソドロジーが住まう場所

ここでは、4章に与えられている「エスノメソドロジーと隣接領域」という表題についてみていこう。この表題は、ある種の効果をもつカテゴリー化である。「エスノメソドロジーと隣接領域」というカテゴリー化によって何が行われているのだろうか。まずここで、「隣接」という術語が用いられていることに注目しよう。「隣接」とは、なにものかへの「隣接」である。「隣接領域」に対しては、「中心」となる領域が含意されているともいえるだろう。次にエスノメソドロジーと「隣接領域」を繋ぐ「と」という言葉に注目しよう。A と B を繋ぐさいに「と」を用いるということは、A と B とが別のものであるということを指し示している。「隣接領域」という術語の含意と「と」の使用によって、非対称的なカテゴリー対を形成することである。すなわち、カテゴリー化のプログラムによって、ここで隣接領域に

含まれる諸研究は、エスノメソドロジーならざるものという地位を割り振られることになるのである。私たちは、少なくとも、ここでの「隣接領域」に含まれている諸研究を、エスノメソドロジーの「中心」にはないものとして読めというインストラクションを読み取ることができる。

(8)本章は、「分析的なワーク:会話データを組織化することの諸側面」[Anderson & Sharrock, 1984]という論文の内容をなぞっている。

(9) 本稿は、『年報筑波社会学(第Ⅱ期創刊号)』の114~128頁に掲載された、岡田光弘、2006「エスノメソドロジー研究の想像力ー 社会に学ぶ想像力を解放するー」を、その重要性に鑑み、誤植などの若干の訂正の上、再掲したものである。今回の版面は新規に作成されているので、引用にあたっては、『現象と秩序』10号からのものとして、頁の指示を行って頂きたい。

#### <文献>

Anderson, Robert J. & Sharrock, Wes W.1984, “Analytic Work: Aspects of the Organisation of Conversational Data,” *Journal for the Theory of Social Behaviour* 14(1):103-124.

Grice, Paul, 1975 “Logic and Conversation,” in D. Davidson and G. Harman(eds.), *The Logic of Grammar*, 64-75. (1998 清塚邦彦(訳)「論理と会話」『論理と会話』勁草書房, 31-59.)

岡田光弘 1994 「いくつかのエスノメソドロジーがあるのか?」『社会学論考』15:93-120.

Pollner, M., 1987, *Mundane Reason*, Cambridge University Press.

Schegloff, E., 1979, “Identification and Recognition in Telephone Conversation Opening,” in G. Pshathas, (ed.) *Everyday language: studies in ethnomethodology*, New York: Irvington: 23-78.

山田富秋・好井裕明 1991 『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社

山田富秋・好井裕明(編)1998 『エスノメソドロジーの想像力』新曜社

好井裕明 1999 『批判的エスノメソドロジーの語り』新曜社

好井裕明(編)2005 『繋がりと排除の社会学』明石書店

## The Sociological Imagination in Ethnomethodology

**OKADA Mitsuhiro**

International Christian University

For Ethnomethodology, the origin of the sociological imagination should be the imagination of people who are actually solving practical problems in daily life and making up society in real time. In this sense, Ethnomethodology is (neo-) praxiology. In order to clarify this point, I explain the logic of Ethnomethodology and sketch two of its off-spring research program- Critical Ethnomethodology and Conversation Analysis, Both of which share an anti-theorizing moment of Ethnomethodology. These discussions make clear the sociological imagination of Ethnomethodological tradition.

*Key words: Critical ethnomethodology, Conversation analysis, Sociological imagination*

\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第10号記念号をお届けします。これまで、半年に1冊ずつ発行してきましたので、2014年10月の創刊以来、刊行前の準備期間を入れて、丸5年がたったということになります。ひとつの区切りと考え、総目次（発行順と著者名順）を掲載しました。また、この総目次の冒頭には、堀田委員による「ふり返り」が掲載されています。特集間関係を中心に、本誌がゆるやかなまとまりをもって発行され続けてきたという内容です。この記事と「総目次」をガイドにして、過去の号に掲載された諸論文を読み返して頂ければ、幸いです（全ての号がWEB上に存在し、かつ国立国会図書館にも入っています）。

本誌は、一見ばらばらな論考の寄せ集め誌にみえます。しかし、一定の方向性はある（あるいは、出てきた）、とも言えるのではないのでしょうか。たとえば、本号の第2論文の末尾では、つぎのような主張がなされています。「罵り表現の運用のされ方については、粗雑どころかむしろ精密で洗練されたもの」（本号35頁）であることが発見された、という主張です。罵るときに、人はぞんざいな言い方をしますが、そのぞんざいさのなかに、ぞんざいさにおいて、洗練が見い出される、というのです。過去に掲載されたエスノメソドロジー系の論文においても、似た主張がありました。例えば、先号の舞弓・樫田論文では、看護学生の「無駄な質問（知っているはずのことを聞く質問）」中に、看護学生の「専門家的慎重さ」が読み取られています（9号50頁）。両論文の主張はともに、一見誤った/乱雑な「現象」のなかにも、有意味な「秩序」があることの発見として、位置づけることができるでしょう。いずれも本誌らしい論文といえると思います。最近『現象と秩序』という本誌の誌名が各論文から透けてみえるようになってきている、という言い過ぎでしょうか。

11号からは、堀田裕子氏に編集長を交代します。次の5年間も『現象と秩序』誌を、どうぞよろしくお願いいたします。（Y.K.）

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2018年度）

編集長：樫田美雄

編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)、堀田裕子(愛知学泉大学)

編集幹事：松田侑子(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第10号記念号 2019年 3月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848, ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>